
Too Hot, A Hot Day.

冴川明希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T o o H o t , A H o t D a y .

【Nコード】

N 1 2 2 4 F

【作者名】

冴川明希

【あらすじ】

休日にタイ料理店でカレーを食べる事になったハボックとロイ。変に器用なロイと、ロイの味の好みを熟知しているハボック。愛しいひととの、ひと時。

それは、ある休日の話

どこかで昼食をという事になり、ハボックとロイは偶々目に着いたタイ料理の店に入った。ここは二人とも初めて入る店だ。

決め手は店の外に置かれた看板に『暑い夏にぴったり』との謳い文句があつた事と、最近駅の近くに出来たこの店は、味も勿論、異国情緒溢れる雰囲気も楽しめると東方司令部でもちよつとした話題になつていた事を思い出したからだつた。

石畳の道は日光を白く反射して暑い。とにかく一回入ってみよう、とギラギラと燃え盛る太陽から逃れるように二人は店に飛び込んだのだ。

「あいつらが言つてたのはこの店の事だつたんだな。珍しいものが沢山あるぞ」

昼時のため店は混んでおり少し待つことになったが、ロイは全く退屈しなかつた。『タイ』はシンの国の南にある国らしいが、ロイは行つた事も、直接旅行者から話を聞いた事も無い。はつきり言つてしまえば、シンもタイもどっちがどっちなのか見分けが付かない。恐らく店内の多くの者がロイと同じレベルだろう。

この店の色彩感覚や空間の使い方はアメストリスとは全く違い、それが異国の雰囲気を実感させていた。見慣れない柄の鮮やかな色合いの薄布が天井から吊り下げられていたり、見たことの無い動物を模つた木彫りの置物があつたり…とロイは持ち前の好奇心を刺激され、店の内装に気を奪われている。

「ここ、結構流行つてますよね。女性にも人気らしいですよ。それにしても…なんか、妙な香りが」

「香を炊いているか、料理に使う香辛料が何かだろうか？外のメニュー

ーにカレーもあると書いてあった」

普段嗅ぎなれない匂いに鼻を鳴らしていた男は、ああ、と頷いた。確かににお勧めランチとして書き連ねられていた中にカレーもあった。香辛料に含まれるカプサイシンは脂肪の燃焼に有効と某蒔蓄博士からの情報を思い出し、ハボックは店内に比較的女性の姿が多いのに納得する。

「お前の隊の奴らにもこの店は人気なんだろう？あいつらは何目当てだ」

からかう様な黒い目がハボックを見上げた。

「まあ、そっちも十分理由になってると思いますけどね。やっぱり、食いがメインじゃないんすか。幾ら体力あるっていつても、食わなきゃ動けないんで。夏は特に食べないと持ちませんもん。カレーは煮込めば肉も野菜も十分取れるし、スパイス効いてるから食い易いんすよ。見た所、量もそこそこありそうだし」

ハボックはテーブルを目で指す。

そんなものとロイがつまらなそうに頷いた所で、店員が二人を席に案内してくれた。

手渡された品書きには、異国の食べ物の方が並んでいる。その中にはカレーもあった。しかも、やたらその種類が多い。

「基本的な質問なんすけど、タイとインドって、違うんすよね？」

「違うな。どちらもシンの南方らしいが」

「カレーって、インド料理じゃなかったっすか」

「…そうだと思うが？」

カレー自体はアメストリスでも普通に食卓に上る料理だ。最初、『インド』の郷土料理として紹介されたカレーは、この国の人が食べ易いように少しずつレシピに手が加えられ、今のハボックたちが食べるカレーになったらしい。だから本場のカレーと、自分たちが普段食べているカレーは違うものだという事を、勿論ハボックも知っ

ている。

だが態々『タイ料理』と銘を打ってあるからには、出されるカレーはインドのものとはまた違ったものなのだろう。

「発祥はインドで、それが周辺のタイへ広まって独自のカレーになったのかもしれない。あくまで想像だが。ファルマンなら知っているかもしれない」

今度訊こう、とロイはひとりごちて再び品書きに目を落とす。

「それにしても——品数多いっすね。カレーってニンジンとかジャガイモを入れてスパイスで味付けして煮込んだもんだと思ってたんですけど」

「文字だけ見ても何が入っているのか想像出来ないものも多いな。野菜をスパイスで煮込んだものが基本と考えておけば良いのか——さっぱり判らん」

言いつつロイの視線は品書きを上から下まで幾度も往復している。暫く迷っていたが、ハボツクが注文を決定したらしいのを悟るとパタンと品書きを閉じた。

ハボツクが右手を軽く挙げる。仕草で察したウェイターが注文を取りに来た。

「私はグリーンカレーを」

「俺はこのナシゴレンって奴で」

ウェイターが奥に去るのを待ち切れず、ハボツクは囁いていた。

「あんた、冒険者ですね」

「ドキドキしないか？緑のカレーだぞ。何が入ってるか気にならないか？」

目を輝かせるロイにハボツクはがっくりと肩を落とす。ロイが自分の好奇心だけで料理を決めたのは明らかだった。

「あんた……苦かったりしたら絶対オレに喰わす気でしょ」

「当たり前だ。そういうお前だってナシゴレンが一体何か見当も付いてないんだろう」

「そりゃそうですけど、焼き飯って事だけは把握してます。それに

オレはもし苦くても全部食べますよ、根性で」

料理が二人の元に来るのにそう時間は掛からなかった。わくわくしているのを隠し切れていないロイの元に運ばれて来たカレーは、クリーム色のスープの中に微かに緑色スパイスの粒がぽつぽつと浮かんでいた。更にローリエの葉が数枚に、緑の小さなシシ唐が数本。スープに浮かぶ小さめのプチトマトの赤が、可愛いアアクセントになっていた。

これらがグリーンカレーの名前の由来かと、実際の皿を見て二人は納得する。

「良かったすねえ、青汁みたいなカレーじゃなくて」

「それはそれで面白かったかもしれない。鍋のに食わせてやったら……」
「イタズラ好きのロイがにやにやと笑う。」

「何であんたはそうやって大将をからかうのが好きなんすか」

「野菜は体に良いんだぞ。栄養素も豊富だし、成長期の子供には必要じゃないかね」

「それについては否定しませんがね、あんたが大将にそんなもん食わしたら大暴れして、店から絶対営業妨害だって怒られますよ」
「そんな他愛の無い会話を続けながら、二人は目の前のランチを口に運ぶ。」

「そっちはどうなんだ？」

「まあまあっすね。辛味も効いてますけど、結構コクがあるかな」
「ナシゴレン——メニューに書いてあった通り、タイ風の焼き飯に加え野菜サラダと温かいスープも付いてきたのだが、どれもハボツクの舌には合格点だ。」

「ふう」

ロイがひと段落というように息を吐き、スプーンを置いた。ロイの醸し出す雰囲気は既に「ごちそうさま」だ。

「あれ、もういらないんすか？」

ロイの皿には、カレーとご飯がそれぞれ三分の一ほど残っている。ハボックは、ロイが基本的に出された物は食べる人種だと知っているので、皿に料理が残っている状態でナプキンで口を拭うのは珍しいと首を傾げた。

「私はもう十分だ。食べていいぞ」

ロイは楽しそうな顔で自分の皿をハボックの方に押し出す。

「じゃ、遠慮無く」

ここまで食べておいて、実は青汁のような不味さでしたということもあるまい。

そう判断したハボックは皿に手を伸ばし、自分のスプーンでその白っぽいスープを掬った。

一口、啜る。

「あれ？」

ん？と言うような顔をしたハボックはもう一回、カレーを掬ったスプーンを口に運んだ。

「どうかしたのかね」

ハボックが目の前のロイを見ると、彼は相変わらずにここにこしている。

「どうって……大佐——これ、あんたの舌には辛すぎじゃないっすか？」

「ああ。辛いな」

あっさりそう言った彼に、ハボックは驚きながらもこっそり安堵していた。あまりにも美味しそうにカレーを口にするから、自分が彼の好みの味を間違えて覚えていたかと思った。

「辛いなら辛いようなりアクションして下さいよ……てっきり美味しいかと思ったじゃないですか」

「美味いぞ？コクもあるしバランスは取れている。辛味以外のな」

「良くここまで食べましたね。あんたが割と辛いのも平気だって知ってるけど……これはちょっと。俺が食っても辛いつすよ」

呆れたように言ったハボックは、ロイのセリフ聞いて納得した。

「どこで誰が見ているか分からんのに、みつともない真似できるか」
ロイはそう言つて、澄ました顔でグラスの水を飲んでいる。

彼は有名人だ。私服とはいえ、見る者が見ればすぐにロイだとわかる位には顔が売れている。更に、有名なだけでなく敵も多い。たとえカレーが自分の舌に合わない、辛過ぎるといふ些細な内容であっても、それが何の弾みで誰に利用されるか判らない。迂闊な振る舞いから弱みを見せるような事があつてはならないのだ。痛くても痛いのを悟らせない。

軍に属している者はそういつた仮面を被る傾向が強い気がするが、ロイの場合それは他者よりも顕著だ。彼の少し行き過ぎの感もあるポーカーフェイスは今に始まつた事ではない。今回もその自衛本能が働いたのだろう。ハボックが見つめる先のコップの水は半分も減つていない。ロイはライスやスープ、サラダといった付け合せで上手く舌を誤魔化しながら、水の量も調節していたらしい。

一緒に食事をしているハボックにさえ舌に合わない事を気取らせない、卒の無い食べ方だった。

「…そうっすね」

何でこんな部分だけ変に器用なんだと、腹の奥からむくむくと湧き上がる、ロイの髪をぐちゃぐちゃに掻き回してやりたいような思いに駆られながら、ハボックはちいさく頷いた。

「御婦人の理想を自ら壊す訳にはいかんからな」

一瞬の沈黙が二人のテーブルに落ちる。

「——そっち？そっちすか！？」

「それ以外に何の理由が必要かね？」

大真面目に言うロイに、一気に身体から力が抜けてぐったりとしてしまったハボックだ。

「そうっすよねー……一瞬でも感動した俺がアホでした」

「お前、どこでどんな方が見てるか分からんだぞ。当然だろう？
普段の振る舞いが大事なのだよ、少尉」

「はいはい」

ハボツクは椅子の背凭れにだらしく頭を預けたが、ロイはその様子に眉を吊り上げる。

「そんな真似をした時に限って、お前の事を「ちょっといいな」と思つて下さる方に見られてしまつたりするんだ。只でさえモテ無いのに、お前は自分で自分の首を絞めているんだぞ」

「あんたねえ……」

バカ犬め、というロイの忠告（？）にハボツクは呻いた。

「と言う訳で、ハボツク」

「はあ」

今の会話のどこに何の理由が含まれているというのか。いつもの気紛れな言葉遊びかと、ハボツクは疲れた表情で顔をロイへと向ける。

「今日の夕飯はカレーが食べたい」

そこにあつたのはロイの不機嫌そうな、拗ねたような表情だったからハボツクは思わず笑つてしまった。

「あーはいはい。あんたの舌に合つた、もう少し辛さ控えめの奴を作りますよ。具はチキンでしょ？」

「何だ、良くわかつたな」

心底不思議そうなロイに、何ででしょうねと返し、ハボツクは伝票を持って席を立った。

「おい、ずるいぞ」

「ずるくないです」

種明かしはしないまま、頻りに首を捻るロイと並んで店を出る。

「なあ、本当に」

「さあ何ででしょうねえ」

笑顔ではぐらかしながら、ハボツクは料理を選んでいた時のロイの真剣な様子を思い出す。種明かしは、夕食の時にでもすれば良い。笑うだろうか、そんな事かと拗ねるだろうかと思像するだけでハボツクは楽しくなってくる。

『だってあんた、メニューに並んだグリーンカレーとチキンカレー
のどちらにするかで、ずっと迷ってたでしょ』

Fin .

（後書き）

東京駅内某店での実話ネタから生まれたハボロイです（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1224f/>

Too Hot, A Hot Day.

2010年10月11日08時09分発行